

古代エジプト人と病気

内田 杉彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

Ancient Egyptians and Diseases

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプト人の生活はナイルの氾濫をはじめとする自然の恩恵に支えられたものであったが、エジプトの気候、風土、そして当時の生活環境は、人間の健康に悪影響を及ぼしさまざまな病気の原因になることもあった。このような病気に対し、呪術や宗教の影響を強く受けた当時の医術には限界があったが、特に外科医療の分野に見てとれる合理性は、後の西洋医術にも相通じるものだったと言えるであろう。

キーワード：古代医術、古代エジプト、古代エジプト医術

Key words : Ancient medicine, Ancient Egypt, Ancient Egyptian medicine

1. はじめに

古代エジプト文明（王朝時代：紀元前 3100～332年）が成立、発展するうえで大河ナイルが重要な役割を演じていたことはしばしば指摘される。雨の乏しいエジプトで農耕と人間の生活が可能になったのは、ひとえにナイル川とその氾濫の賜物であった。氾濫がもたらす水と肥沃な泥によって得られる豊かな収穫のおかげでナイル流域には早くから多くの人口が集中し、文明が成立、発展する基礎が作られたのである。

ナイルによって潤された古代エジプトの国土（現在のアスワンから地中海沿岸のデルタ地帯まで）は、大麦やエンマー小麦のような穀物、豆類やレタス、キュウリなどの野菜、イチジク、ザクロ、ブドウなどの果実をはじめとする豊かな食物を生み出した。ウシやヒツジ、ヤギ、ブタ、ガチョウなども飼育されており、肉や乳製品が食用とされていたほか、野鳥やナイルの川魚も豊富であった。当時の人々が誰でもこのように豊かな食物を楽しめたわけではないとはいえ、彼らの

食生活は概して比較的豊かであり、栄養の点でもバランスのとれたものだったと言えるであろう。^{1) 2)}

古代エジプト人は、このような恵みをもたらしてくれるナイルの氾濫を神として崇め、氾濫によって潤された国土（ケメト「黒い土地」）を、人間の住める唯一の世界、理想の世界とみなしていた。来世の存在を信じていた古代エジプト人が死後に暮らすことを望んでいた世界も、大河や水路が流れ、作物がたわわに実った、ちょうどナイルの谷のコピーのような世界であり、このことからナイル流域を理想郷とみなす彼らの思いがうかがえる。

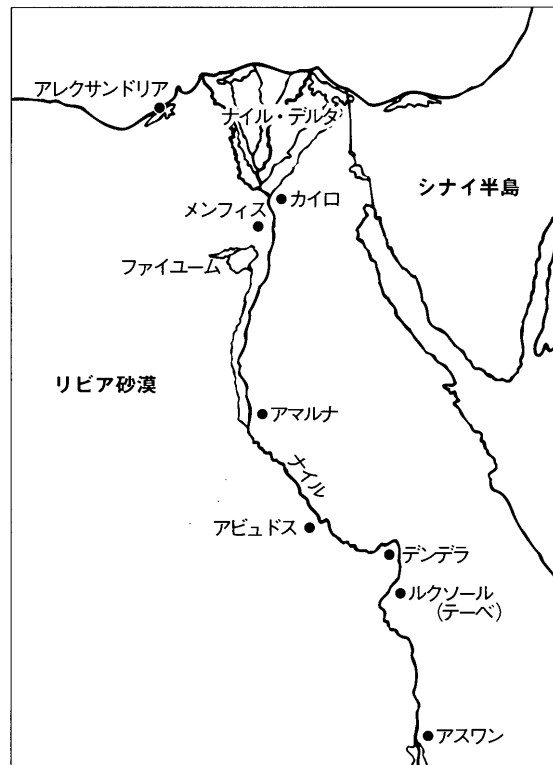


図1. エジプト略図

しかしエジプトの自然環境は、現実には決して恩恵ばかりを与えたわけではなく、人間の健康にとって有害な影響を及ぼすこともあり、また、住居や衛生状態、食習慣といった当時の生活環境のなかにも、病気の原因となるものが多く含まれていた。そのため古代エジプト人がこよなく愛していた現世の生活も、そう長く続けられるものではなく、彼らの平均寿命はせいぜい25歳から35歳程度だったとされている。^{1) 3) 4)} ピラミッドのような壮大な遺跡に代表される華やかさの陰には、さまざまな病気におびやかされながら懸命に生きた人々の生活があったのである。彼らはどんな病気に苦しみ、病気をどのようにとらえていたのだろうか、その一端を述べてみたい。

2. 環境と病気^{1) 2) 3)}

古代エジプト人の生活とナイル川は密接な関係にあった。彼らはナイルの水が引かれた用水路で洗濯をし、そこから炊事用の水や飲料水を汲んでいた。また、当時は、灌漑のための水路網や溜池が多かったため、そのような水の中を泳いだり、歩いてわたったりするのはごく普通のことであった。

しかし、このようなナイル川との密接な関係には、非常に危険な面があった。ナイルの水中には住血吸虫症の原因となるビルハルツ住血吸虫が生息していたのである。現代のエジプトでもこの病気は大きな問題と

なっており、6年前の調査でも人口の約12%が感染しているという結果が出ているが⁴⁾、ナイルの水と接触する機会が多く、効果的な治療法を持たなかった古代エジプト人にとって、この病気はより深刻なものであったに違いない。事実、古代エジプト人の遺体のなかには、住血吸虫の卵や住血吸虫症の抗原が確認されている例がいくつかあり、そのうち最も古いものは紀元前3200年頃までさかのぼるのである。

古代エジプト人の遺体からはさらに、やはりナイルの淡水に生息していたメジナ虫のほか、回虫、サナダムシやその卵が発見されることがあり、一体のミイラから数種類の寄生虫が確認されることさえある。これは野菜や果物を良く洗わずに食べたり、加熱が不十分な肉を食べたためであると考えられるが、このような寄生虫が発見されているミイラは社会の比較的上層に位置していた人々の遺体であり、当時の衛生状態がいかに劣悪なものであったかがうかがえる。

またエジプト北部のデルタ地帯は湿地が多く、マラリアを媒介する蚊が繁殖していた。最近の調査によっていくつかのミイラからマラリア原虫の抗原が確認されており、古代エジプトで実際にマラリアが蔓延していた可能性があることがわかっている。⁴⁾

ナイルの谷の東西にある砂漠も、人々の健康を脅かす存在であった。リビア砂漠を吹き渡る風は、特に毎年3月から4月にかけてしばしば強い砂嵐を起こす。この砂を肺の中に大量に吸い込むと塵肺症を起こす可能性があるが、ミイラの体内に残された肺組織のなかには砂の粒子で覆われているものがいくつかあり、生前にこの病気にかかっていたことがうかがえる。

空気が乾燥していて晴天の日が続くというエジプトの気候も、健康にとって有害な一面を持っていた。強烈な日光は熱射病や頭痛のような病気の原因になったばかりでなく、砂ほこりと同じく目を痛める原因にもなった。またエジプトの酷暑のなかでは、さまざまな虫、特にハエが数多く発生し、そのような虫が媒介する感染症、とくにハエの媒介する眼病が広まったであろう。なかでもトラコーマは失明の原因にもなる重大な病気であるが、古代エジプトの墓の壁画や浮き彫りには、竖琴弾きとして働く盲目の人々の姿がしばしば表わされており、そのような眼病によって失明した人々が多かったことがうかがえる。

古代エジプト人の住居の建材として使われていた日乾レンガは熱を通しにくい性質を持っており、日中の暑さを防ぐだけでなく保温効果も備えていて、エジプトのように昼と夜の温度差が激しい地域には最適であった。しかし、直射日光を防ぐために窓が小さく作られていたこともあって、彼らの住居、とりわけ一般庶民の狭くて部屋数の少ない家は換気が不十分であり、パン焼きや料理などで生じる煤煙が部屋の中にたちこめるのは避けられなかった。この煤に汚染された空気

表1. 古代エジプト年表

(ショー、イアン & ニコルソン、ポール (内田杉彦訳) 『大英博物館古代エジプト百科事典』、原書房、1997の年表をもとに作成)

先王朝時代(紀元前 5500 ~ 3100 年)

王朝時代(紀元前 3100 ~ 332 年)

初期王朝時代 (第1 ~ 2 王朝: 前 3100 ~ 2686 年)

古王国時代 (第3 ~ 6 王朝: 前 2686 ~ 2181 年)

第一中間期 (第7 ~ 11 王朝前半: 前 2181 ~ 2055 年)

中王国時代 (第11 王朝後半 ~ 第12 王朝: 前 2055 ~ 1795 年)

第二中間期 (第13 ~ 17 王朝: 前 1795 ~ 1550 年)

新王国時代 (第18 ~ 20 王朝: 前 1550 ~ 1069 年)

第三中間期 (第21 ~ 24 王朝: 前 1069 ~ 747 年)

末期王朝時代 (第25 ~ 31 王朝: 前 747 ~ 332 年)

プトレマイオス朝 (マケドニア・ギリシア系王朝) 時代
(紀元前 332 ~ 30 年)

ローマ支配時代 (紀元前 30 ~ 後 395 年)

を吸い続けると、炭素粒子が肺に付着して炭粉症の原因となるが、ミイラの肺組織にも炭素粒子が付着しているのがしばしば見つかり、この病気が当時も一般的なものだったことがわかる。

また、人間が生活する暖かい家には、当然、ノミやネズミも住みついた。当時の人々は家庭のごみを外の通りに掃き出すか、あるいは共同のごみ捨て場に捨てるだけで放置していたように思われるが、このような状況もネズミやハエを引きつけ、疫病が発生する原因となったであろう。紀元前 1140 年頃の国王ラメセス 5 世のミイラからは、天然痘による病変と思われるものが見つかり、この病気が古代エジプトで蔓延していた時期があったことを物語っている。

古代エジプト人の生活において牧畜は、農耕と並んで大きな位置を占めており、彼らと家畜の関わりは非常に密接なものだったが、これは家畜から人間へ病気が感染する原因にもなった。そのような病気としては、すでに触れた寄生虫の感染症のほか、ウシのミルクや肉を通じて感染する結核があげられる。当時の彫像や絵画のなかには背中が湾曲した人の姿を表わしたものがいくつか見られるが、これは結核菌によって脊椎が冒された脊椎結核の症状を示しているとされている。このような症状はまた、いくつかのミイラからも発見されており、おそらくウシから感染したと思われる結核が蔓延していたことを物語っている。多くの人口が集中していた古代エジプトの町では、とくに庶民の住居の場合、狭い空間に数多くの人間が住んでいたと思われる、伝染病が流行しやすい環境にあったと言えるであろう。

この他にも古代エジプトの資料から確認できる病気は、関節炎などの骨の病気やポリオ（小児麻痺）、腫瘍など数多いが、最後に古代エジプト人の食生活に関わる特有の病気について触れてみたい。古代エジプトには砂糖がなく、主な甘味料として使われていたハチミツは高価であって、たやすく口にできるものではなかった。したがって、現代社会ではありふれた病気である虫歯（う蝕）は、当時のエジプトでは比較的少なかったが、そのかわりミイラや人骨に見られる古代エジプト人の歯は、一様に歯冠の咬合面が著しく摩滅している。咬合面が摩滅することそのもの（咬耗）は普通に見られるもので、摩滅が進んでも新たに象牙質が作られて失われた歯の組織がカバーされる。ところが古代エジプト人の歯の摩滅は、象牙質の形成が追いつかないほどに激しく、歯髄が露出するほど進んでいる場合が多い。歯髄が露出するとひどい痛みが起き、そこから細菌が侵入して菌性膿瘍となるが、事実、古代エジプト人の歯列のなかには、そのために歯が抜けてしまった痕を示すものがしばしば見られるのである。

このような歯の摩滅が生じた原因は、彼ら古代エジ

プト人が日常的に食べていたパンにあったと一般に考えられている。当時のパンには、小麦の収穫から製粉までの段階でかなりの量の砂粒がまぎれこんでいた。そのなかには脱穀や、穀粒と粗穀の選別作業、石臼を使った製粉の際に偶然紛れ込んだものもあっただろうが、製粉作業を容易にするため、故意に砂粒を混ぜるようなことも行われており、この砂粒が古代エジプト人の歯を徐々に摩滅させていったと考えられているのである。

また、一般的に言って、王や貴族のような上流階級の人々のミイラの歯のほうが、庶民のミイラや人骨に見られる歯に比べて、歯周病や虫歯、菌性膿瘍といった病気の痕跡を多く示している。これはこのような裕福な人々が甘い菓子や脂肪の多い肉類など贅沢な食物を多く食べていたためであろう。事実、ミイラから判断すると、当時の上流階級の人々はおおむね肥満体であり、墓の浮き彫りや彫刻に表わされた彼らの姿のなかには、豊かな食生活をおくったことを誇るかのよう、肥満した肉体を表現したものが数多く見られるのである。

3. 医術と治療^{3) 4)}

エジプト医術は、古代の地中海世界では有名であった。ヘロドトスはエジプトの医術が専門別にわかれ、歯科医や眼科医など専門の医者が数多くいたと述べており、ホメロスも、エジプトが様々な薬草に恵まれ、国民は優れた医術の知識を備えていると述べている。また、エジプトの医師が外国の王族のもとに病気治療のため派遣されたり、外国人がはるばるエジプトまで医師の診察を受けに来ることもあった。

古代エジプト語で「医師」を意味する肩書き（スウヌ）やそれを含む称号を持つ人々の名前は、彼らの墓や墓碑などに刻まれた碑文に数多く残されており、現在のところエジプト 3000 年の歴史を通じて約 150 人の医師の名前や肩書きが確認されている。これら名前の残っている医師の多くは、国王専属の医師（「宮廷医師」、「王の医師」）や貴族に仕えていた医師など上流階級に属する人々であったが、その一方で、村や町で診療をしていた医師も数多くいたと思われる。また、医師たちの「監督官」や「管理官」のように一種の管理職についているものもいて、当時の医師に階層や社会的地位の差があったことがうかがえる。また、眼科医や歯科医、胃腸病や肛門の病気を扱う医者のように何らかの専門分野を持つ医師も多く、ヘロドトスの言うようにある程度の専門分化があったことがわかる。また、男性ばかりでなく女性の医者もおり、マッサージ師や看護人、薬剤師、外科助手のような医療補助を行う人々がいた可能性もある。

それでは当時の医師が行った病気の治療とはどのようなものだったのだろうか。それを示す主な資料がい

表 2. 古代エジプトの主な「医術文書」

(名称は近代の収集家や学者にちなんだものや、現在そのパピルスが所蔵されている場所を示したもの。Nunn, J. F.: Ancient Egyptian Medicine. British Museum Press, London, 1996による)

名 称	写本製作年代	内 容
エドウィン・スミス・パピルス	紀元前1550年頃	外科、特に外傷
エーベルス・パピルス	紀元前1500年頃	一般、特に内科
カフーン・パピルス	紀元前1820年頃	婦人科
カールスベア・パピルス第 8 番	紀元前1300年頃	婦人科
クロコディオポリス・パピルス	紀元後 150年頃	一般
チェスター・ビーティ・パピルス第 6 番	紀元前1200年頃	直腸の病気
ハースト・パピルス	紀元前1450年頃	内科
ブルックリン「蛇」パピルス	紀元前 300年頃	蛇の咬み傷
ベルリン・パピルス	紀元前1200年頃	内科
ラメセウム・パピルス第3, 4, 5番	紀元前1700年頃	婦人科、小児科、眼科
ロンドン・パピルス	紀元前1300年頃	主に呪術
ロンドン/ライデン・パピルス	紀元後 250年頃	内科、呪術

わゆる「医術文書」である。この医術文書は当時の医師の手引きとされたもので、パピルスの巻物に書かれており、外科、特に外傷の症例を取めた「エドウィン・スミス・パピルス」や、主に内科に関する治療法を記載した「エーベルス・パピルス」（いずれも紀元前 1500 年頃のもの）をはじめとして、断片しか残っていないものを加えると14例が現存している。

これらの医術文書によると、古代エジプトの医師は、人体の構造について当時としてはかなり詳しい解剖学的な知識を持っていたように思われる。眼や鼻、口といった人体の外部の特徴だけでなく、心臓や肺といった多くの内臓にもそれぞれ名前がつけられ、明確に区別されていたのである。古代エジプトで人体解剖が行われたという証拠はないものの、遅くとも紀元前 2600 年頃には遺体をミイラにする際に内臓を除去する習慣が行われるようになっており、おそらくミイラ作りを担当していた職人たちから、人体の内部構造に関する知識が伝えられた可能性がある。

また、骨格の観察や、外傷、とりわけ皮膚の内側にまでおよぶ重大な外傷を治療した経験も、解剖学的な知識の獲得に役立っていたに違いない。たとえばエドウィン・スミス・パピルスには、頭部に重傷を負った患者を治療する際の指示が記されており、傷口から露出している脳の特徴が書かれているのである。

医術文書にはさらに、人体の内部には数多くの管（メト）が通っていると記されており、心臓につながる 22 本の管のほか、眼、耳、鼻や手足、そして肝臓や肺などの内臓につながるメトが挙げられている。この管にはおそらく、血管やリンパ管、気管、消化管など管状のもの、そして細長い筋肉までが含まれていると思われる。エーベルス・パピルスには、心臓からの管が手足や後頭部などに通っていてそのようなところ

や心臓のあるところに手を当てると心臓が「話す」のが聞こえると書かれているが、これが心臓の鼓動と脈の関係を指しているのは明らかである。内臓や器官の働きについてもある程度は理解されており、たとえば飲食物は胃に入り、その残留物が結局は肛門から排出されることや、膀胱に通じている 2 本の管（おそらく尿管）によって尿が運ばれることもわかっていた。また、生殖のプロセスについても基本的には理解されており、たとえば胎盤と子宮はムト・レメチュすなわち「人の母」と呼ばれていて、胎児の成長に関わる器官とみなされていた。

しかし、内臓や器官がどのような働きをするかについて当時の医師が持っていた知識は、概して限られたものだったと言える。エドウィン・スミス・パピルスには、脊髄の損傷によって手足の麻痺が生じるという正しい観察結果が記されているが、脳の働きについてはまったく理解されていなかった。医師を含む古代エジプト人はすべて、心臓こそ人間の活動の中心であるとみなしており、ここに、理性や感情、人格が宿ると信じていたのである。彼らの来世思想では、死後に復活するためには来世の王であるオシリス神の審判を受けなければならないとされており、その審判の場では、死者の心臓が秤にかけられると信じられていた。そのため、ミイラが作られる際にも心臓は常にミイラの体内に残されたのに対して、脳は単に捨てられてしまうだけであり、医術文書を見ても、脳に何か重要な役割が負わされているようには思われない。

古代エジプトの医師は、心臓に多くの管が通じており、それが心臓の鼓動を伝えることは理解していたものの、これらの管が運んでいるのは空気であって、人間が吸い込んだ空気はまず、肺におくられたあとで心臓に入り、そこから 22 本の管によって身体中に送ら

れると考えていた。彼らは、血液循環の仕組みについては気づいておらず、心臓から出た管は、体内にある他の管とともにすべて肛門に通じているとみなしていた。これらの管には、空気以外に、水や飲食物、粘液の他、排泄物などを運ぶ管もあるとされ、その流れが順調で空気や飲食物が体内に行き渡り、排泄物など有害なものが肛門からとどこおりなく排出される状態が健康な状態であると考えられていたのである。

それでは病気とは、古代エジプト人にとってどのような状態を指していたのだろうか。外傷（身体外部の損傷）については、当時の医師たちも実際の観察によってその原因や症状をかなりの確に把握しており、当時としては合理的と言える診療を行っていたように思われる。たとえば外科の症例を集めたエドウィン・スマイス・パピルスには、皮膚の裂傷から骨折、捻挫、脱臼などの詳しい症例と、たとえば骨折の際には副木を使って固定し、傷口には湿布をするというような理にかなった治療法が記されている。

しかし、内科の疾患については、事情は大きく異なっていた。内臓や器官の機能について限られた知識しか持っていなかった当時の医師にとって、内科治療を要するような病気は理解を超えたものだったのである。体内を走る様々な管の働きによって健康が保たれると信じていた彼らは、この管の流れが何らかの原因によって停滞したり、本来なら排出されるべき何か有害なもの（ウエケドゥと呼ばれていた）が、管によって身体の各所に送られてしまうと、そこでさまざまな病気が起きると考えていた。人間の遺体が腸から腐敗しはじめることはミイラ作りの経験から知られており、そのためこのウエケドゥは、排泄物と同じく腸で作られるとみなされていたようである。

彼らはさらに、何か有害なものが外部から体内に侵入して病気が起きるとも考えており、その有害なものの中には、さまざまな名前のついた「虫」が含まれている。このような考え方は寄生虫を肉眼で確認した経験によるものと思われるが、たとえば菌の病気のように、寄生虫とは関係のない病気もこの「虫」のせいになされており、病気と寄生虫の関係がどの程度理解されていたか疑わしい。

また、外部から侵入してくるものの中には、魔物のような超自然的な存在も含まれていた。これは、古代エジプトのように宗教が社会のあらゆる部分に浸透していた文明では、むしろ当然のことといえるだろう。たとえば、夜、人間が寝ている間に、病気を引き起こす魔物（アア）が体内に入り込んで、心臓や腹部の病気を引き起こすとされていたが、この魔物は「神あるいは女神のアア」や「神あるいは死者のアア」とも呼ばれており、人間に悪意を抱く神々や悪霊が病気の原因のなかに含まれていたことがわかる。また、エーベルス・パピルスには、人間の右耳からは「生命

の息」、左耳からは「死の息」が、それぞれ入ってくるという記述が見られる。古代エジプト人は風を神の吐く息と考えており、耳や鼻からその「息」（風）が入ってくるものと考えていた。この「死の息」もおそらく、人間に悪意を抱く神が吐きだしたものとされていたのであろう。また、さきに触れたウエケドゥにしても、男女の性別をもつ存在として医術文書に記される場合があり、やはり人間の体内に生じる一種の魔物と考えられていた可能性がある。

当時の医術では、個々の病気の性格や原因までははっきりと突き止めることができず、医師の経験や知識では手に負えない病気は、魔物や神々のせいになされていたのであろう。事実、病気の治療にあっていた人々のなかには、医師ばかりでなく呪術師や神官、とりわけ疫病の神として恐れられていたセクメト女神の神官も含まれており、魔物を追い払い、神々の怒りをなだめるための呪文が、しばしば医師による治療と並行して唱えられていた。医師のなかには、そのような呪術師や神官を兼ねているものもおり、呪術と宗教が当時の病気治療において大きな位置を占めていたことがうかがえる。

治療は、外傷治療のための手術を除くと、もっぱら薬物の投与によって行われており、医術文書、特にエーベルス・パピルスには、薬の調合と投与の方法が病気ごとに詳細に記されている。薬には、内服薬や外用薬、座薬のほか、患部を薫蒸するものなどがあり、鉱物などの無機物や動植物など自然界に産出する様々な材料を薬物とし調合して作られるのが普通だった。

古代エジプト人が薬物とみなしたもののなかには、確かにある程度の治療効果を持つものも含まれていた。たとえばハチミツは、咳止めの薬や傷口の治療薬など多くの処方利用されていたが、その甘味には咳をある程度やわらげる効果があったただろうし、ハチミツにはすぐれた抗菌作用があるため傷の治療に実際に役立つことも指摘されている。⁵⁾ また、古代エジプト人がアイライン用の顔料として使っていた孔雀石（マラカイト）は、眼病の薬の材料としても広く用いられていたが、やはり抗菌性があることが確認されており、⁵⁾ ある程度の治療効果があったと考えられる。ひまし油の原料であるトウゴマも下剤として使われており、駆虫薬（虫下し）の材料には、実際にそのような効果のあるザクロやニガヨモギが含まれていた。

しかし、古代エジプト人が薬物として利用したものの大部分は、実際には治療効果がまったく期待できないか、あるいはかえって有害と考えられるものであった。たとえばそのなかには、レンガを砕いて粉にしたものや泥、動物の血液や脂肪、内臓、そして排泄物まで含まれていたのである。また、医術文書のなかに薬物として言及されている無機物は、花崗岩や赤鉄鉱、玉髓のような鉱物など、薬物としての効果があったと

は思えないものが大部分を占めている。抗菌効果がある孔雀石にしても単独で使われたのではなく、あくまでも薬の材料のひとつにすぎなかった。眼病の薬の材料とされているものの多くは、赤土や鉱物、樹脂、ガチョウの脂肪、さらには人間の排泄物など、とうてい眼病治療の効果があるとは思えないものばかりである。また、薬物として名前が挙げられている植物は約160種類あり、そのうち現在知られているどの植物か多少とも特定できるものは58種類あるが、そのなかで実際に治療効果があることが判明しているのは、すでに触れたザクロ、ニガヨモギ、トウゴマのほか、タマネギ、シナモン、クミンなどあわせて28種類にすぎないのである。

治療効果が確認されている薬物にしても、その効果がどの程度理解されていたのかは疑問である。たとえば、歯性膿瘍など歯の病気の治療に使われた外用薬の材料にはハチミツがしばしば含まれていた。これはおそらく、ハチミツが外傷の治療に有効だったためであろうが、もちろん実際には、かえって歯の症状を悪化させる結果になったであろう。また、エーベルス・パピルスには、ある種の眼病の治療法として雄牛の肝臓を患部に当てる処方記が記されているが、夜盲症に効果のあるビタミンAを豊富に含む肝臓も、外用薬としたのでは効果がなかったであろう。

このように実際の治療効果がない薬物が使われ、薬効があるものも必ずしも適切に使われなかった背景には何があったのだろうか。そこにはやはり、古代エジプトの医師が病気の性格と薬物の効能を正しく理解できなかったことにくわえ、呪術と宗教が当時の医術に強い影響を及ぼしていたという事情があったと考えられる。おそらく、動物の血液や排泄物のような嫌悪感を催させるようなものは、病気の原因となる魔物を追い出す効果があると思われていたのである。また、当時、薬物とされていた物質のなかには、患者に投与すればそれが持っている（と信じられていた）好ましい性質が患者の身体に移り、病気が治ると考えられていたものもあったように思われる。たとえば、動物の脂肪や内臓にはその動物が持つ力、石や金属のような無機物には耐久性や美しさといった性質が、それぞれ備わっていると信じられており、そのために薬物とされていた可能性がある。

おそらく、古代エジプトの医師が処方していた薬は、せいぜい患者の症状を軽くするのに役立つ程度で、病気の原因となるものに対しては直接の効果はなかったであろう。ただし、宗教が大きな力を持っていたその当時は、患者の神々に対する信仰と呪術に対する信頼の念が、病気が必ず回復するという希望を生み、症状の軽減にある程度役立った可能性は大いにあると言える。古代エジプトの神々のなかには病気平癒の靈験あらたかとされた神々が数多く、そのなかには、すでに

触れた疫病の女神セクメトのように病気の原因となるものを支配する神々にくわえ、病気を引き起こす神や魔物に打ち勝つような強い力を持つとされた神々が含まれていた。たとえば、冥界の王オシリス神にまつわる「オシリス神話」には、夫のオシリスを殺されたイシス女神が息子のホルスをヘビやサソリなどの危険から守って育てあげ、成長したホルスが父の仇を討ってエジプトの王となるという顛末が書かれているが、このため、イシス女神と彼女に育てられる子供の姿のホルスは、あらゆる危険な生物や魔物から人間、とりわけ子供を守る神々として崇拜されていた。また、当時は衛生状態が悪く、乳幼児の死亡率も非常に高かったと推測されるが、古代エジプトの民間信仰のなかで崇拜されていた神々のなかには、出産の際に母親と新生児を守り、子供をさまざまな危険から守るとされた神々が数多く含まれることも、そのような状況を暗示している。そうした神々としては雌のカバの姿をし、ライオンやワニなどの特徴を兼ね備えたトエリス女神と、グロテスクな小人の姿をしたベス神が有力であったが、これらの神々の恐ろしい姿は、病気を引き起こす魔物を追い払うためのものであったと考えられる。

古代エジプト人にとって、病気や災難から身を守るために神々の力が秘められた護符を身につけ、病気にかかれば神殿にお参りして平癒を祈願するのは普通のことであった。たとえばエジプト南部のデンドラに残る女神ハトホルの神殿には一般に「サナトリウム」と呼ばれる施設が設けられていたが、これは医師による治療が行われた場所ではなく、病気にかかった人々が、神の力が備わった「聖なる池」の水で水浴をしたあと泊まり込み、神が夢枕に立って治療の方法を告げるのを待つ場所であった。医師による治療を受けるというのはあくまでも病気を治すための手段のひとつにすぎず、それよりもまず、このような神頼みや呪術のほうが優先されていた可能性さえある。たとえば、当時、出産は母体にとっても新生児にとっても非常な危険を伴うものであり、医術文書にも出産や婦人科の病気を扱ったものが多いが、実際の出産に医師が立ち会った形跡はなく、さまざまな守護神の姿が刻まれた護符を妊産婦の腹の上に置くという「まじない」が広く行われていたのである。

しかしそれでもなお、古代エジプト医術が不完全とはいえ経験と観察を重視し、ある程度の合理性を備えていたことは注目に値すると言えるだろう。たとえばエドウィン・スミス・パピルスには、患者の訴えを聞き、目による観察と手を使った触診を含む診察を行ったあと、治せるか、治癒の可能性はあるか、それとも治療できないかの3種類の診断をし、それに応じて治療をするという三段階の診察手順が症例ごとに示されているのである。古代エジプト医術はエジプト文明の衰退とともにギリシア医術に取って代われ、忘れら

れていくが、そのなかに含まれていた合理的な原理は、ギリシア医術や後の西洋医術と相通じるものと言えるだろう。

4. おわりに

古代エジプト人にとって、病気とは彼らの理解を超えた災難であるだけでなく、呪術や宗教のような文化や生活の一部でもあり、やむを得ないものとして受け入れられていたと言えるかもしれない。健康な状態で天寿を全うすることを彼らは理想と考えていたが、実際にそのような人生を送ることができたのはほんの一握りの人々であった。彼らがパピルスに書き記した書簡の末尾には、別れの挨拶として「あなたの健康が良いものでありますように」(ネフェル・セネブ・ク)という言葉がしばしば書かれている。この言葉には、健康をかけがえのないものとする古代エジプト人の思

い、そして現代人にも共通する思いがこめられているのである。

文 献

- 1) ファイラー, ジョイス (内田杉彦訳) : 病と風土. 学芸書林, 東京, 1995
- 2) Fleming, S, Fishman, B, O'Connor, D and Silverman, D : The Egyptian Mummy : Secrets and Science. 69-74, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia, 1980
- 3) ストロウハル, エヴジェン (内田杉彦訳) : 図説 古代エジプト生活誌. 原書房, 東京, 1996
- 4) Nunn, JF : Ancient Egyptian Medicine. British Museum Press, London, 1996
- 5) Majno G : The Healing Hand, Man and Wound in the Ancient World. 111-120, Harvard University Press, Cambridge and London, 1975